—個人事例—

根気よく集中して活動する子

細　川　彰　夫

はじめに

本校の児童・生徒の主障害は知的な障害である。そして、その上に様々な他の障害を併せ持った者が多い。H．Yはその内の脳性麻痺後遺症という身体障害を併せもつ生徒の一人である。彼にとって、障害は治すものではなく、克服するべきものであるととらえて指導してきた。

高等部3年として、もうすぐ卒業をひかえてどのように「からだづくり」をすすめていけばよいかを検討していきたい。

1．プロフィール

(1) 生育歴

- 昭和48年6月10日生。現在18歳。高等部3年。(男)
- 出生時体重　2550g
- 歩行開始2歳6か月頃。
- 3歳児検診を受け、歩行・発語の遅れに気づく。
- 中央病院で軽度の脳性小児麻痺と診断を受ける。
- 3歳よりK児童館（保育園）へ通園する。
- 6歳でK小学校へ入学する。1年生の途中で、T市へ転出するが2年生になってK小学校に帰り、6年卒業まで在籍する。
- 昭和61年、本校中学部に入学する。
- 平成元年、本校高等部に入学、現在に至る。

(2) 諸検査による実態

① 知能検査　田中B式ＩＱ３７

② 運動能力テスト（「資料編」参照）

③ 体力テスト（「資料編」参照）

④ 性格行動上の特徴

明るく、すなおな性格である。だれとでもすぐうちとけて仲良くなれる。が、それが時としてけじめのなさに通じることがある。また、調子にのりすぎてのぼせたり、人の尻馬にのって善悪の判断をしないで行動することもある。体を使って動くことは好きで、力仕事を進んでする。運動も器用ではないが尻込みすることなく取り組んでいる。だが、すわってするような細かな作業は苦手で、集中力に欠けることが多い。

身体的には、脳性麻痺の後遺症として左足に拘縮があって少しひきずった歩き方をし、背中がま

がって姿勢が悪く、また視力が左右とも0.4である。

2．取り組みの構想

(1) 指導仮説

個人目標　根気よく集中して活動する子

つけたい力
- 途中でなげださず、自信をもって最後までやりぬく力。
- まわりに気をとられず、自分の気持ちをコントロールする力。

からだづくりの取り組み

からだの個人目標
- 足の障害を補うことのできる力をつける。
- 自主的に全身を使って運動する力をさらに伸ばすとともに、静的な作業に対する集中力、持続力を高める。

仮説　からだの問題点は大きく言って二つである。
ひとつは身体の障害、いまひとつは性格上の問題である。身体の方は体を動かし鍛えることによって左足の弱さを日常生活では支障のない所までにしている。だが、これからの職業生活においてはさらに筋力をつけておかないと疲れやすさは人並み以上であろう。自主的に体を動かす習慣をつけておくことは他の生徒以上に必要と考えられる。性格的には、人の良さと自信のなさがまわりを気にして自分の取り組みに集中することをさまたげている。結果を気にするなというわけにはいかないが、他と比較してみるのではなく、自己のなかでの進歩を認識することによって自信をつけていけると予想する。

その他
- 清潔感を養い、身のまわりの整理・整頓をする。
- 善悪の判断を自分で持ち、人の言いなりにならない。
- 調子にのりすぎないように自制する。

(2) 指導の手だて

① からだづくりを通して将来の社会人としての資質を養うための取り組み(職業科・生活一般)

職業科（コース、共同作業、校内・現場実習）の学習を通して、社会にでて一日の労働に耐えるだけの体力と集中力を養う。また、対人関係を円滑にするためにけじめをもって人に接すること、自信をもって行動し自分で善悪の判断をすること、身のまわりの整理、身体の清潔等に気をくばることに重点をおいて指導する。

なお、本生徒のもつ明るさや積極性をそこなわないように十分配慮したい。

② からだづくりを直接目的として行なう取り組み（保健体育・からだづくり養訓)

障害を認識しそれを克服していく気構えをもたせたい。そのために、障害に対する正しい知識を与えそれに対する対応を考えさせたい。

また、自主的に楽しんで運動する経験を多くもたせ、日頃から進んで運動をする習慣を身につけさせるとともに、拘縮防止のための運動も自分で意識してできるように指導していきたい。

3．指導の実際

(1) 保健体育

体育はＢグループに入っている。

ここでのねらいは、運動経験を積み重ね運動技能の向上をはかることである。

今年度１学期に取り組んだ内容は

- 短距離走　スタートダッシュ
  タイヤ引き
  つま先走などである。

本生徒の場合、身体に障害があって身体が硬いため器用さはないが障害を気にしないで進んで運動しようとしている。力はついてきており記録は少しずつ伸びている。

ただ、授業中にのぼせたり、他の生徒といっしょになってふざけたりするなどの態度はあまり改善されていなかった。

(2) からだづくり養訓

養訓は２グループに入っている。２グループではそれぞれが自分に必要な運動を覚えて正確におこなうことを目標にしている。本生徒のねらいは脳性麻痺後遺症のため左足の障害があるのでそれをカバーするため現状を後退させない運動に取り組むことである。ここでは、障害を治すというのではなく運動によって障害の部位が硬化することを防ぐとともに、まわりの筋肉を強化することによって障害による動きのぎこちなさをできるだけカバーしていくことが大切であると考えている。

足の筋肉をのばすＨ．Ｙ

内容として

- 肋木を握って、足の筋肉をのばす。
- 肋木を握って、立ったりしゃがんだりする。
- 肋木を使って身体をそらす。
- 肋木にぶらさがる。
- 他の生徒に補助してもらって椅子にこしかけて背中そらしをする。

などの運動に取り組んでいる。

時間になれば、自主的に取り組んでいるが、一つひとつの運動にまだ正確さがみられない。

(3) 職業科

年度当初にそれぞれの生徒に職業のコースを選択させた時、何人かの生徒は希望を変更した。本生徒もその中のひとりであった。希望は農作業コースであった。本生徒は１、２年とも農作業コースに属し、粗大運動の多い活動を得意としていた。しかし、将来の仕事を選択するうえで、苦手とする作業に取り組ませ進路選択を広範なものにするためにも、あえて、製作コースに編入した。

もともと、この種の作業は、これまでは、集中力が持続しなかったり、作業がいいかげんになったりすることがあり本生徒にとって克服しなければならない内容であった。

うまく続くだろうかと心配したが、初めの糸のこを使ったパズル作りがおもしろかったようですっかり調子にのって授業にでるようになった。茶托づくりのためののこびきはかなりきつそうだが集中してがんばることができた。器用さはないが、それを理由に作業意欲をなくしたり、集中を欠いたりすることが少なくなっている点は評価できる。

(4) 日常生活

2学期になって、本生徒は自分から学級委員に立候補して当選した。まわりの生徒が生徒会に立候補する関係でたぶん自分がしなければならないと判断したのだろう。しかし、これまでであれば、だれか友だちに推薦されて引き受けるという形であった。人前にでると緊張してあがりやすい性格であるがそれでもがんばろうという自信や自覚がでてきたためだと思われる。

ともだちに助けられたり、時には先生に注意されたりしながらもまじめに学級委員の仕事に取り組んでいる。

身のまわりの清潔についても、少し良くなってきた。更衣室のロッカーが洗濯ものだらけという事態もめったになくなった。まだまだ気をつけていなければ、抜け落ちている点もあるが社会人となるためにはこれらのことに気をつけなければならないという自覚が少しずつ芽生えてきている。

2、3学期を通して、自分の障害認識についての学習を進めるとともに、今一度基本的な生活習慣の見直しを行なっていきたい。

4．考察及び今後の課題

H．Yが一番変ったのは1学期の現場実習の取り組みの後であった。それまでは、体を清潔にすること、忘れ物をしないことなど注意をしてもあまり真剣に聞いてはいなかった。だが、実習がはじまるとこれまでとちがって3年生の現場実習は将来の就職に結びつくことから家庭の協力もあって、身のまわりがきちんとしてきた。態度も学校から見せていた幼なさとも受けとれる行動が少なくなり、ずんぶんと大人びた行動が見られるようになった。

本生徒は、まわりの環境に影響されやすいという性格であるが、この場合は実習先が変ったこともあってそれがいい方向に出た。技術的にはまだまだであるが、すなおな性格がうまくいっている原因のひとつであろう。また、体を動かすことが好きということも仕事を続けていく上で大切な要素であろう。

本生徒の場合、技術的には不器用でも、積極的に動こう・働こうという姿勢が見られることがなによりも好ましい。身体に障害を残しているので、他の生徒よりは、技術が身につきにくかったり、疲れやすかったりするだろうがそれを克服していく力をぜひ残された期間で身につけられるようさらに指導していきたい。また、性格面での人の良さを大切にしながらも、自信をもって自分の判断で行動できるような強さも身につけて卒業させたいものだと考えている。